

超高校級の技術者（リメイク版）

海虎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

超高校級の肩書きを持つ倉橋零と一般人の鹿島悠里がIS学園で起ころる様々なことに巻き込まれるお話

【注】以前書いていた物のリメイク版となります。豆腐メンタルの為批評や中傷コメントは辞めてください。そのようなコメントは作者のやる気を大きく損ねるため辞めてください。キャラの使い回しがございます。

1話
プロローグ

設定

目

次

8 1

プロローグ 設定

その巨大な学園は都会のど真ん中の一等地にそびえ立っていた。私立希望ヶ峰学園。学業、スポーツ、芸術、芸能あらゆる分野の超一流高校生達を集め育て上げることを目的とした政府公認の超特権的な学園。そんな学園での生活も今日から2年目に入ろうとしていた。（僕の名前は倉橋零、超高校級の技術者として希望ヶ峰学園の2年生だ。つて誰に自己紹介してるんだろ）

2年生に上がり場所が変わった教室に向かう、教室に着くと既に自分以外のクラスメイトが全て揃つており各自騒いでいた

「おはよう、みんな久しぶり」

「おう、ひさしぶりじやのう！見たところしつかりわしが渡したトレーニングもしつかりこなしているようじやの！」

「つてことは倉橋も強くなつたのか！バトろうぜ！」

「終里さんほどは強くなつてないよ」

「なんだそうなのか、まつ今日からまたよろしくな」

「よろしく頼むぞ！」

「よろしく2人とも」

式大と終里との会話を終えて席に着く、同じく席に座つていた九頭龍と辺古山達にも挨拶を済ませる

「そういうや倉橋春休みは何してたんだ？」

「ん？春休みは今年ここに入つてくる1年生の子と新しい発明に付き合つてもらつたり、フランスにいるテストパイロットの機体調整、”男性でも動かすことが出来るISの試作開発”とかで忙しかつたら休んだ気がしないな」

「さらつと凄いことを聞いた気がするが」

「まじかよ、お前まじで世界をかえられるもしれないな」

「僕はそんなに凄くないよ、僕くらいの人は大勢いる」

「お前みたいな天才が大勢いたら今頃こんな世の中になつてないだろうよ」

九頭龍の言うように今の世の中はISの登場で変わってしまった。

IS（インフィニット・ストラatos）は9年前、当時15歳の篠ノ之東が発表した宇宙開発を目的としたパワードスーツとして開発されたが。ミサイルなどの兵器も通さない絶対防御と言われるシールド、戦闘機よりも速いスピードと機動力を持つ兵器として今では扱われている、その原因は「白騎士事件」そこでISの力を見せつけ宇宙開発としてでは無く兵器として運用されるようになってしまった。そしてISの欠点である女性しか使うことができないという事で世の中は女尊男卑の世界に変わつていつた。

「そうだよ、倉橋君。君はそんなくだらない世の中に産まれた希望なんだ。もっと胸を張るべきだよ」

九頭龍達と話しているところにボロボロの狛枝がやつてくる

「相変わらずだなおめえはつて大丈夫か」

「ほんとだよ。今日はどんな災難にあつたの？」

「ハハ、僕みたいなクズを心配してくれてありがとう」

「坊ちゃん、狛枝はいつもどおりのようです」

「そうだな、これくらいの軽口叩けるなら大丈夫だな」

「確かに大丈夫そうだね」

「酷いなー、そう言えば春休み中に全国の学校で男性のIS適正検査が行われていたみたいだね、織りなんとかの他にも1人適正がある人が見つかったらしいよ」

「そういうや、俺達はまだ検査受けてないよな」

「そうだね、適性があつたら左右田君とか花村君はかなり喜びそうだ」「まあ受けなくともいいと思うけどね、どうせ誰も動かせやしないから」

「そういう倉橋は動かせんじやないのか？」

「秘密かな」

「言つてるようなもんじやねえか」

九頭龍達との会話に花を咲かせていると教室のドアが空く、担任の雪染ちさと黄桜公一が入ってきた瞬間に皆席に着く

「みんな久しぶりね！今日から新学期、みんながつばつしていくよー」

「あと悪いが男子はこれから校庭に出てきてくれ、ISの適正検査が

あるんだと」

黄桜から支持を受けた零達は校庭に向かい適正検査を受ける

「なあ零、もし適正あつたらどうなるんだ？それにお前に適性がある事がバレたら」

左右田が零に小声で聞いてくる

「多分 I-S 学園に行くことになるかな、まあ交渉はするけどね」

「だよな、ハーレム生活も悪くないが自分の進路を強制されるのはちょっととな」

「左右田君がそんなこと考えてるなんて意外だよ」

「お前俺の事なんだと思ってんだよ！それに俺はソニアさん一筋だ！」

「そこ！話してないで早くしないさい！」

黒スーツの女性がさけぶ

「はいはい」

左右田はそういう I-S に手をかざすが何も反応しない、そして零の番になる

「あんたで最後ね、早く済ませちゃって」

零は無言で手をかざすと I-S が反応し打鉄が装着されるが直ぐに零が解除する

「そんな！あなたここで待つていなさい」

黒スーツの女性は電話をかけ始めるが零は女性の言うことを無視して教室に戻る、教室に戻るとみんなから色々聞かれた

「零お兄もしかして I-S 動かしちゃった？」

「まあね」

「あんたもしかしてずっと隠してたんじゃないの？」

「まあ公表しても碌なことにならないから黙つてただけどね、知つてるのは左右田君と家の会社の重役だけ」

「そうだつたのか、じやあこれから倉橋はどうなるんだ？」

「日向君、多分 I-S 学園に転校じゃないかな最悪研究所かも」

「まじかよ」

「大丈夫です、私がそんなことさせません！」

ソニアが言う

「大丈夫だよ、こつちはかなり手札があるから」

「お前さんがそう言うなら大丈夫か」

「でも倉橋君はこれからハーレム生活が有り得るのか！羨ましいね」

「花村君ならそう言うと思ったよ」

クラスメイト達と話していると校内放送がはいる

「倉橋零君、至急学園長室まで来るよう」

「もう呼ばれたか、じやあいつてくるよ」

学園長室に着くと黒スーツの女性3名と学園長の霧切仁が待っていた。

「君が超高校級の技術者での倉橋零君か」

「ええ、あなたは織斑千冬さんですね、他2人は知りませんが。それでその織斑千冬がなんのようです？」

「君には2日後から新入生としてIS学園に転校してもらう」「お断りします、僕がそこに行くメリットがありませんから」「あなた男の分際で千冬様に逆らつてるんじゃないわよ！」

「うるさいですね」

「大体こつちはIS学園で保護してやるって言つてるんだから二つ返事で了承しなさい」

「君、辞めるんだ」

織斑千冬が1人の女性にそう言う

「ですが」

「やめろと言つている」「わつわかりました」

「こちらが提示できるメリットとしてはさつきもこの女が言つていたように君の保護だ」「それだけですか？」

「これを拒否すれば研究所に送られる可能性がある」

「それは有り得ませんね」

「何」

「織斑さんは超高校級の肩書きがどれ程の力を持つているかご存じで

すか？」

「いや、その肩書きがあるだけで将来が約束されるということしか知らない」

「そう、僕のことを欲しがる場所は沢山あるんですよ、ISの分野だけではなく他の分野からもね。だからそんな人材を日本政府やIS委員会が研究所送りになんてしたことが発覚したら世界の損失なんですよ、僕はこれでも世界の希望でもあるんですから、それはあなたもご存知でしよう織斑さん」

「そうですね」

「それにIS学園が後ろ盾にならなくとも既に倉橋コーポレーションという後ろ盾がありますから」

緑髪のメガネの女性が口を開く

「ですが、テロリストなどの組織に狙われる可能性が」

「そんなの去年から狙われてますよ、現にここや会社に何度も襲撃がありましたから」

「本当ですか？霧切学園長」

織斑さんが学園長に聞く

「ええ、ですがここへの襲撃は警備のものが鎮圧してくれました」

「それに会社にも戦力はかなりありますから」

織斑さん達は黙る、すると学園長が口を開く

「倉橋君、君にメリットがあればIS学園に行つてもいいのかい？」

「ええ」

「なら君が条件を提示したまえ、織斑さん達もそれでいいかな。これがこちらができる最大限の譲歩だ」

「わかりました」

「この項目を守ることができるなら行きますよ」

1. 授業の免除

2. 学籍を希望ヶ峰学園に残したままにする

3. 基本的に倉橋雲に適応される校則は希望ヶ峰学園のものとす

る

4. 倉橋雲個人の研究室を用意する

5. 倉橋零に危害を加えたものに対する制裁を加えても良い（生死は問わない）

6. 倉橋零は基本的に技術の提供はしない

7. 倉橋零を戦力として扱わない、扱う場合報酬を支払う事

8. テストパイロットのスカウトを邪魔することを禁ずる

9. テストパイロット、7の項目と同文

9個の項目が書かれた紙を織斑さん達に渡す

「こんな項目守れる訳」

「わかつた、この項目を守ることを上に掛け合つてみる」

「織斑先生！」

「2人とも行くぞ」

そう言うと織斑さん達は学園長室を出ていった。

「流石だね、倉橋君」

「いえいえ、ですが政府も馬鹿ですね。本職の人でなく織斑千冬を交渉役に持つてくるとは。大方ブリュンヒルデの肩書きをチラつかせれば来るとでも思つていたんでしょう」

「確かにかなり適当言うと思つたよ、いくら世界の希望と言つても無理やり送られる可能性もあるだろうに」

「まあ確かにそれもありますけどそれも無いに等しいですよ。学園長も去年のテストで僕が何を提出したのか分かつてますよね」

「ああ、あれには驚かされたよ。もうこんな時間か戻りたまえ」

「わかりました」

学園長室をでて教室に戻る

「どうだつた倉橋」

「まあなるようになるかな」

「何があつても俺達はお前の味方だからな」

「そうだぜなんでも俺に相談しな」

「さすがつす左右田ちゃん」

「実際はこういうのに力になれそなソニアお姉と九頭龍くらいだけね、でも日向お兄や左右田の癖にいい事言うじゃん」

「余計なこと言う必要は無いだろー！」

「西園寺の言うようにまじでなんかあつたら言えよ」「ありがとう」

「それと話は変わるんですけど今日は授業はないそうです」

「それもそうか、罪木さん教えてくれてありがとうございます」

それから夕方までクラスメイト達と騒いでいた

夜9時頃に寮に戻った零の携帯が鳴る。

「上に掛け合つた結果、君のIS学園行きが決定した。項目は全て受け入れるようだ」

「わかりました」

そういう電話を切る、こうして倉橋零の日常は崩れ去つた。

1話

4月、桜も散り始めている頃新しい学び舎に悠里はいた。近代的な教室に、ハイテクを詰め込んだ机、窓の外には広い敷地とその先に大きく広がる海が見えた。そして貫くような視線の数々。頭を上げると見えるのは嬉しそうに視線を送つてくる男子と息を飲む女子生徒、そして何よりいつまで経つても後ろの席に誰も来ないということがありになつていた。

「（どうして僕がこんな目に）」

鹿島悠里は4月にデュエルアカデミアに入学するはずだつた決闘者だったが織斑一夏がISを動かしたせいで行われた適正検査に引っかかりアカデミアへの入学取り消しになりここに来ることになつた。

「（それにしても後ろの人いつまで来ないつもりなんだろう、入学式ももう終わつてるのに）」

悠里がそんなことを考えていると緑髪の眼鏡の先生が入つてくるそして教卓についた。

「おはようございます！今日から皆さんの副担任になる山田 真耶です、皆さんよろしくお願ひしますね！」

元気よく山田先生が挨拶するが誰も返さない
「えつとじやあ皆さんのお自己紹介をしましよう、廊下側の一番前からお願いします」

あ行の人から自己紹介を済ませていく、そして1人目の男性操縦者である織斑一夏の番になる

「えつと、織斑 一夏です、……以上です」

すると突然織斑の頭がはたかれた。

「まともに自己紹介も出来んのかお前は」

織斑を叩いたのは織斑千冬その人だつた。織斑千冬の登場に教室が一気にうるさくなる

私が織斑千冬だ、お前達には基礎知識を半年で覚えてもらう、その後は訓練だ！基礎動作は半月で覚える。いいな」

「(、)」は軍隊かよ」

「千冬様よ！本物の千冬様よ！」

「貴方の為なら死ねます！」

「貴方に憧れて北海道から來ました！」

「よく毎年ここれだけの馬鹿が集まるものだ。私のクラスに集中させているのか」

「もつと叱つて！罵つて」

「でも時には優しくして」

「そしてつけあがらないようになまをしてー！」

「あまり時間がない、鹿島お前も自己紹介をしろ気になつてゐる奴も多いだらうからな」

織斑先生に言われ席をたち自己紹介を始める

「鹿島悠里です、元々は今年からデュエルアカデミアに通う予定でしたがよろしくお願ひします」

「デュエルで鹿島つて」

「もしかして美月様の弟！」

「凄い有名人の血縁者が2人も」

「(、)でも姉さんか」

「織斑、自己紹介はこうやつてやるんだ。それと皆が気になつてる鹿島の後ろの生徒だが今ここに来ている、入つてこい」

「はいはい」

「はいは1回でいい」

入ってきた生徒はIS学園との制服ではなく、茶色の制服を着ておりその制服には希望ヶ峰学園の校章が入っていた。予想外の人間の登場に皆目を見開いていた。ISを学ぶものなら誰でも知っている人間といえば開発者の篠ノ之束、ブリュンヒルデの織斑千冬の2人を上げるが去年からもう1人加わった、開発者以外の人間がISのコアを開発したと世間を騒がせた張本人が目の前にいた

「倉橋雲です。一応君達の1つ上だけどよろしく。知つてるとと思うけど希望ヶ峰学園77期生の超高校級の技術者です」

「倉橋はここに來ているが基本的には希望ヶ峰学園の生徒もある。

諸君も気になることがあれば聞いてみるといい」

織斑先生がそう言うと零はもののすぐく嫌な顔をしたがすぐに治し空いている席についた。こうして鹿島悠里の I.S 学園での生活が始まった。

「（自己紹介はしたけどどうせすぐこの教室にも来なくなるんだよね、このクラスメイトと宜しくするつもりもないし。いや、2人の男性操縦者は一応見る期間が必要かな）」

ホームルームが終わるとすぐに悠里は授業の予習を始める、その光景を見ていた零は軽く感心していた。

「（自分の立ち位置を理解してるってことか）」

そこに織斑がやつてくる

「なあ俺は織斑一夏よろしく」

「・・・ああ、よろしく」

「よろしく」

「俺の他にも同じ境遇がいて良かつたよ」

「（こいつ、自分が何をしたのかわかつてないのか）」

「（こんな奴のせいで僕は・・・。いや僕が動かせてしまつたのも原因だし）」

「ちよつといいか？」

そこに1人の女子がやつてくる

「筈？」

「織斑を借りてもいいか」

「別にいいよ」

「僕も構わないよ」

織斑がどこかに行つたあと悠里が零の方を向き言い放つ

「その観察するみたいな目は辞めてくれないかな、いい気分は誰もしないと思うから」

「へえー気づいてたんだ、ごめんね。仕事柄人を観察することもかなりあるから」

「まあ僕も人の観察はよくするからそういう視線には敏感なんだ」

そういう悠里は前を向いて予習に戻った。

「（成程。さすがはエリート決闘者の卵と言つたところだね、あの視線にも気づいてたのか。これは候補に入れて置いてもいいかもしない）」

その数分後にこつちにまた女子がやつてくる

「ちょっと宜しくて？」

「ん？」

「（この人確かイギリスの代表候補生の）なんでしょうオルコットさん

「倉橋君、この人は？」

「デュエルしかしていなかつたのなら私を知らなくても仕方ありませんわね、私はイギリス代表候補生のセシリア・オルコットですわ」

「よろしくお願ひします、オルコットさん」

「よろしくですわ、そして倉橋さんに知つていただいていたなんて光栄ですか」

「ええBT適正の高い操縦者だからデータを見たことがあるんですよ、それで何か御用ですか」

「特に用はないですわ、強いていえば男性操縦者がどのような方々なのか見に来ただけですわ」

「なるほど、ではもうすぐチャイムがあるので席に戻ることをオススメしますよオルコットさん。」

「そうですわね、また来ますわミスタ倉橋、ミスター鹿島」

チャイムがなり遅れて戻ってきた織斑と篠ノ之は織斑先生に叩かれていた。

「（まあそななるよね、でもこれからISの座学か寝てよ）」

そうして授業が進んでいく、織斑が顔を青くしているのが悠里からもみてとれた。

「織斑君、鹿島君わからない所はありますか」

「一応大丈夫です」

「ほとんど全部わかりません」

「え?! 全部ですか？ 他にわからない人はいませんか？」

山田先生が聞くが誰も手を挙げない

「悠里も零もわからないだろ、嘘ついてもいい事ないぞ」

「いえ僕は大丈夫です、着いてくのにやつとですが」

「・・・ん?なんか言つた?」

織斑の言葉に反応して零が起きる

「お前も授業ついてけないんだろ?だから寝てるんだろう?」

「いや別に、こんな教科書があれば簡単なことが理解できないのかが理解できない」

「は?」

「それにこんな初歩の初歩を僕が知らないなんてありえないでしょ」「どうしてだよ!そんなに言う必要も無いだろ」

すると織斑先生が口を開く

「織斑、参考書はどうした」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

織斑が言い終える前に叩かれる。

「後で再発行してやるから1週間で覚える」

「えつ1週間での厚さはちょっと」

「やれと言つている」

「はい」

「鹿島、倉橋についてIS関連で騒がせたことを応える」

「はい、彼は超高校級の技術者であり去年の希望ヶ峰学園の期末テストでISコアの複製作り上げており、IS委員会とIS学園に10個づつコアを寄付しています。それと確か第三世代機の量産化に成功しています。」

「その機体の名はわかるか」

「いえ、そこまでは」

「まあ春休みからISの勉強を始めたのなら知らなくても仕方がないか。だがこれだけ分かつていれば確かギリギリついていけそうだな。織斑今、鹿島が言つたとおり倉橋はIS開発者以外でISコアを作れる唯一の天才ということだ」

「そういうことだから僕がわからないなんてことはないってわけ」

「そういうことだ織斑、それと倉橋に教えてもらおうなんて考えるな
よ」

「そんな」

「このやり取りをしていると一限終了のチャムがなる
もうこんな時間が倉橋、次の時間はクラス代表を決めるからちやん
と授業2出るよう！」

「・・・わかりました」

授業が終わると織斑がこちらにやつてくる

「なあ頼むよ！1週間での量は無理だ」

「嫌だね、織斑先生にも言われたのもあるけど、君の勉強に付き合つて
やるほど暇じゃない」

「なんだよ！困つてんだから助けてくれてもいいじゃないか！」

「君の場合は自業自得だからね、それに基本的に僕は希望ヶ峰学園の
生徒として扱われるから希望ヶ峰学園の期末試験用に研究成果を作
らないといけない。だから君には教えない」

「なら悠里、教えてくれないか」

「僕も自分の事でいっぱいだから
『そんな友達なんだから助けてくれよ！』

「友達？誰と誰が？」

悠里が織斑に向かつて言う

「俺とお前らだよ、同じ男性操縦者同士で同じ境遇の友達だろ」

「僕らまだ知り合つて2時間程度の仲だけど、少し馴れ馴れしいよ」

「僕は君のことなんてどうでもいいよ、それにここに来るきっかけになつた君に怒りすら覚えてるから即刻この場から立ち去ることをオ
ススメする」

悠里の次に零が言つた言葉に畠山が唖然とするが直ぐにくつてかかる

「なんでだよ！ここに来ることになつたのはお前も動かしたからだろ
！」

「あのさ、僕は結構前からI-Sの開発なんかに関わってるんだよね、そ
れで君よりも前に適性があることはわかつてたんだよ」

「じゃあなんですが公表しなかつたんだよ！」

「君つてホントに馬鹿だね、そんなことしたらここに送られるからに決まつてるじゃん。それにその時はまだ超高校級の肩書きはなかつたから研究所だつたかもね」

零が言い終えると良いタイミングでチャイムがなり織斑は渋々自分の席に戻つていった。そして織斑先生達が教室に入つてくる

「それでは授業を始める前にクラス代表を決める」

「先生クラス代表つてなんですか？」

「クラス委員の様なものだ。他にもクラス対抗戦などに出ることになる、自選他薦は問わない」

（研究の時間が減るからなる理由はないな）

「はい！織斑君がいいとります」

女子生徒の1人が言うと次々と織斑を推薦していく

「えつ俺？俺はそんなのやらない」

「馬鹿者、自選他薦は問ないと言つたはずだ」

「なら俺は零と悠里を推薦する」

織斑がそう言うとほかの女子達も推薦していく

（織斑君、巻き込んだな）

（面倒なことになりそうだ、オルコットさんが震えるぞ）

「納得いきませんわ！」

ドンっと机を叩き立ち上がる

「男がクラス代表だなんて恥さらしも良いところです、私にそのような屈辱を味わえと言うのですか！いいですか？クラス代表は実力の高い人間、私や雪村さんのような代表候補生がなるべきなんです！私は後進的な極東の島国で茶番をする気なんて毛頭ありませんわ！」

（まあ言つてることは間違つてないけど少し言い過ぎだ。周りは日本人ばつかだぞ）

「イギリスだつて大したお国自慢ないだろ！世界一不味い飯で何年覇者だよ！」

「貴方！私の祖国を馬鹿にしますの！」

「先に侮辱したのはそつちだろ！」

2人のやり取りに零と悠里はため息をつく

「日本がバカにされてんだぞ！2人ともなんか言つたらどうだ！」

「別にオルコットさんが言つてることも間違つてないよ、後半はちよつといきすぎ」

「僕も鹿島君と同じ意見かな、それに僕は日本がバカにされてもどうとも思わないよ。それにこんな茶番に付き合つてる暇はない」

「茶番だと！」

「あと話は変わるけどオルコットさん、周りを見て発言した方がいい、いつか身を滅ぼすよ」

「決闘ですわ！私に恥をかかせたことを後悔させますわ！」

「は？」

「いいぜ四の五の言うよりわかりやすい」

「くだらな」

雲が呟く

「なんで僕まで巻き込まれなきや行けないんだ」

「あら逃げますの？」

「そうとらえてもいいよ、鹿島君は知らないけど僕はこれほど時間を無駄にすることは無いと思つてるから」

「僕もやりたくはないかな、初心者で動かし方もわからないから」

「お前ら揃つて腰抜けかよ！男なら戦えよ！」

ようやく織斑先生が口を開く

「オルコットは自薦でいいんだな」

「はい、よろしくお願ひします」

「なら一週間後にクラス代表戦を行う、オルコット、織斑、鹿島、倉橋は準備しておくよに。」

「いやだから僕達はやらないって

「他薦されたんだ拒否権はない」

こうしてクラス代表戦が行われることが決まった。